

兄妹（はらから）

山口大学 しまふくろう

パリオリンピック2024は日本チームが多くのメダルを獲得して盛り上がりを見せ閉幕した。ぼくにとって一番印象に残ったのは柔道52kg級の阿部 詩 選手の2回戦での敗退と、試合後泣き崩れ立ち上がれなかった彼女、そして自然に会場に沸き起こった“ウタ・コール”だった。さらに、兄の一二三 選手の妹を気遣う多くのコメントだった。かれら兄妹には何かしら以前から親しみを感じていた。たまたまNHK番組「ファミリーヒストリー」を見ていたら、母方には南の血が流れているようだ。

日本古代史において兄妹は大きなテーマである。イザナギとイザナミは神々や国地(くにつち)を生み成し、キナシノカルとカルノオホイラツメは愛を貫き自死した。同じ母から生まれた兄妹の関係性には不思議な霊力が宿っている、と古代人は感じていたのか。あるいは、彦姫性(兄妹による祭政の分掌)が行われていた古層社会における兄妹の強い絆が、時に苦悩や悲劇をもたらしたのか。

イクメイリビコイサチ(第11代垂仁天皇)の后サホビメとその兄サホビコ(垂仁天皇の従兄弟)の物語は古事記における同母兄妹の悲劇物語の秀逸である。ある日兄が訊いた、「妹(いろも)よ、夫と兄といずれが愛しいと思っているのか；孰愛夫與兄歟」。これに対し、「お兄さまを愛しいと思っています；答曰愛兄」と妹は答えている。兄を守護すべき妹としてとっさに答えたのか。しかし、比較の相手は夫婦の契りを交わした夫である。サホビメは不吉な予感がしただろう。兄は自分の企みを明かし、「妹よ、まことに兄のことを愛しいと思っているのであれば、この紐飾り付きの小刀

で大君が眠っているところをねらって刺し殺し、兄妹で天の下を治めようではないか」と妹に迫った。なぜ兄にこのような企みが生まれたのか、その遠因について古事記は一切述べていない。

もちろんサホビメは驚いた。しかし、愛しい兄の頼みを断ることもできず、そのまま大君の隙をねらっていた。ある日、己の膝を枕に寝ている大君の首を刺そうと、三たびその小刀を振り上げたが、そのたびに哀しい心がわくのを抑えることができず、ためらっているうちに涙があふれて大君の顔に落ちて流れてしまった。大君は驚いて飛び起き、後に尋ねた。「あやしい夢を見た。沙本(さほ)の辺りから叢雨が降ってきて、にわかにわが面を濡らした。また、錦色をした小さな蛇が、わが首にまわりついた。こうしたありさまを夢に見るというのは、いかなるしるしであろうか」。サホビメは、その大君の言葉を聞いて隠し通すことはできないと思い、今までのことをすっかり打ちあけてしまった。

それを聞いた大君は、すぐさま軍(いくさ)を仕立てて、サホビコの立てこもる稲城(いなぎへ



イラスト：司馬さやか

急こしらえの簡易な城)を攻めた。夫と兄とが刃を交わすことになり、胸を痛めたサホビメではあったが、兄への思いを抑えることができず、大君の宮の後方(しりえ)の門からこっそり抜け出し、兄が立てこもる稲城に逃げ込んでしまった。この時、サホビメは腹のなかに子を宿していた。それを知った大君は、サホビメをそのままにしてサホビコを攻め殺すことができず、稲城を取り囲みながらそのままいく月か過ぎてしまった。

ここはどう考えるべきなのだろうか。古層社会、特に母系的な性格を濃厚にもつ氏族においては夫婦の契りよりも血肉の方が優っていた、ということなのだろうか。この部分が文字ではなく、音声によって語られていた当時においては、サホビメの選択と行動は演劇的な効果をあげ、聴き手は手に汗を握ったことだろう。妹の苦悩が現代のぼくたちの胸にも強く迫ってくる。しかし、結果として妹は兄を選んだ。当時においてもその二人の関係は社会的なタブーである。悲劇の始まりである。

そのまま時が過ぎて行くうちに、サホビメが宿した腹の子は生まれ落ちた。するとサホビメは、その御子を出して稲城の外に置き、使いのものを大君に送り、「もし、この御子が大君の御子と思し召すならば、お育てくださいませ」と言わせている。そこで大君は屈強な軍人(力士; ちからびと)を選び、御子を受け取る時に、御子を抱いている母君も一緒にかささらう作戦を立てた。しかし、サホビメの周到な準備のため御子は取り戻せたが、母君を手に入れることはできなかった。



イラスト：司馬さやか

その後、サホビメと大君の御子を巡る駆け引きが繰り返され、さらに子の名付け(サホビメはホムチワケと名付けた)や養育法、後添えなどの事柄に関しての大君の問いに、サホビメは丁寧に答えている。これらのことは、当時の社会では子の帰属権や養育権は母方にあり、母系的な側面が強かったことを示していると思われる。さすがの大君も、もう問うことがなくなり、ついにサホビコの稲城に火をつけた。その時サホビメも兄に従って死んでしまった。

サホビメが残した御子ホムチワケ〜ホムチは「火内」の意〜は、生まれついて物言わぬ御子だった。大君はこの御子の病を癒そうと船遊びをしたりして、いろいろ試してみるのだが、髭が八掌にも伸びるほどになっても、物を言うことはなかった。

それで困っていると、ある時大空を飛び翔ける大クグヒ(白鳥の古名)の鳴き声を聞いた御子が、初めて顎をパクパクと動かしながら、何か物を言いたそうにした。それを見た大君は鳥取りの男に言いつけて、御子が見た大クグヒを取るように命じた。鳥取りの男は木の国から針間の国、さらに多くの国を越え、科野の国まで追いかけて、ついに高志の国に到ってようやくのことで追いつき、その和那美(わなみ)の水門で網を張り、ようやくその鳥を生け捕りにして、倭へ持ち上がって大君に奉った。大君は喜んでその鳥を御子に見せたのだが、御子はやはり物を言うことはできなかった。

そんな折、悩める大君が寝ていると、夢にお告げがあった。「わが宮を、大君が坐す大殿と並ぶほどに作り修めたならば、御子は必ず真言を問うことができようぞ」と、教えさとする神があった。太占による占いによると、その祟りは出雲の大神の御心であるということが判明した。そこでウケヒによって試され、合格したアケタツとその弟のウナカミを加えてホムチワケの御子のお供として、出雲の大神のもとに遣わした。

そうして、ようやくに出雲に到り着き、すぐに大神を拝み終えて帰り上ろうとする時に、肥の

河の中洲ににわか作りの宮を作って御子を籠らせた～大神の許しを得るまで精進潔斎して籠るのである。そして、出雲の国造の祖で、キヒサツミというものが青々とした木の葉を用いて山のごとくに飾った設えを川下に飾り立て、召し上り物を御子の前に供えた時に、その御子がにわかに物言った。出雲の大神の祟りが解けたのである。喜んだアケタツとウナカミは、ホムチワケの御子をあじまさ（ビロウ）の長穂の宮に坐さしめて、都の大君のもとへと早馬の使いを急がせた。

その時のこと、ホムチワケの御子は一夜、ヒナガヒメと共寝をした。そのあまりの美しさにホムチワケはひそかにヒナガヒメのさまを覗き窺っていると、人ではなく蛇だった。恐れおののいたホムチワケはすぐさま船を出してヒメのもとを逃げ出し、大君のもとへ帰り着いている。

アケタツとウナカミから報告を受けた大君はたいそう喜んで、すぐさまウナカミを出雲国に引き帰らせて、先の夢のお告げのままに、出雲の大神の宮を大君の大殿のごとくに作り飾らせた。古事記には、大君のもとに帰り着いた御子ホムチワケの、その後のことは何も書かれていない。

ここまでの数段落の記述は、古事記という書物の成り立ちを考える時にとても重要と思われる。古事記は本来ヤマト王権の近くにいた“語り部”によって語り継がれていたらしいこと、そしてそれを七世紀の中頃におそらく藤原不比等の命（あるいは自分で書いたか）により漢文で記述したらしいこと、そしてその語られる物語は滅びていった出雲王権にかなり同情的であるようにみえること、さらに天から降りてきたと主張する人々を客観的に見ているようにみえること。また、ホムチワケの病は出雲の大神の祟りであり、その怒りを鎮めるためには大君の宮殿と同じ大きさの宮殿を作り奉ることが出雲の大神オオクニヌシが天つ神に国を譲る条件であったこと、などを思い出させます。さらに、ヒナガヒメとのエピソードはスサノヲのヤマタノヲロチ退治の物語を連想させます。

そういえば高天の原のアマテラスとスサノヲも姉と弟の関係でした。同母兄弟姉妹（はらから）の関係性には何かしら霊力が宿っているようです。男三兄弟のぼくにはうかがい知れない感情の働きが、兄妹の関係性には存在するのでしょうか。

参考資料：

- 1. 古事記 倉野憲司校注 岩波書店
昭和42年4月20日 第7刷
- 2. 古事記 梅原猛著作集第8巻「神々の流竄」
1981年10月12日 第2刷
- 3. 古事記 三浦佑之訳・注釈
2002年10月30日 第12刷
- 4. AI君に兄妹の関係性について Raymond Chandler 風のショートストーリーをお願いした： Brother and Sister

In the dim light of the cramped apartment, shadows danced on the walls like ghosts from a past that wouldn't stay buried. The air was thick with the smell of stale cigarettes and the faint trace of a long-forgotten perfume. Benny sat slouched in his threadbare armchair, the kind you only notice when you're looking for a place to sink into despair. He was nursing a whiskey, the amber liquid swirling in a glass that had seen better days — much like him.

His sister, Clara, stood by the window, a silhouette against the dying light. She was a haunting figure, with a fire in her eyes that could scorch the wallpaper off the walls. Benny always thought of her as the one with the dreams, the kind that glittered and sparkled, but always felt just out of reach. He could still remember the summer afternoons they'd spent down by the pier, chasing hopes as if they were as tangible as the waves crashing against the rocks.

"Benny, you've got to get out of here," she said, her voice cutting through the haze of his whiskey-soaked thoughts. It was a voice that could slice through concrete, filled with a mix

of urgency and exasperation. "This place is a tomb."

He chuckled, a low, bitter sound that filled the silence like an unwelcome guest. "And where would I go, Clara? The city doesn't hand out escape routes like candy."

Her back straightened, and for a moment, the light caught her profile just right, framing her like a noir heroine in a cheap flick. "You know what I mean. You're stuck in this rut, and it's not just the whiskey. You're living like a ghost."

He took a long pull from his glass, savoring the burn. "Maybe being a ghost isn't so bad. No one expects anything from you."

"Stop it," she snapped, turning to face him, her hands balled into fists. "You're my brother. You're supposed to be better than this. You promised me once — remember? You'd never let life grind you down."

"Promises are for suckers, Clara," he said, his voice a rasp, like gravel sliding against metal. "I'm no hero. Just a guy who knows where the shadows lie."

"Maybe you should start finding the light instead," she shot back, her eyes blazing with a fierce determination. "I'm not giving up on you, Benny. Not now, not ever."

And as the sun dipped below the horizon, painting the room in shades of twilight, Benny felt a flicker of something he hadn't felt in ages — a hint of hope wrapped in the stubborn love of a sister who wouldn't let him fade into the darkness.

